

## スペインのイメージ 版画を通じて写し伝わるすがた

国立西洋美術館(上野公園) 23.07.04~09.03



フラメンコ、闘牛・ドン・キホーテ、アルハンブラなどの我々が思い浮かべるスペインの「イメージ」の多くは、19世紀にこの国を訪れた旅行者たちによって作られたものであった。

そうしたイメージをかたちづくり、流通させた重要な媒体が、複数刷られて簡単に持ち運びができた「版画」であった。

本展は、17世紀の「リベラ」から「ゴヤ」「ピカソ」「ミロ」「タビエス」と受け継がれる「スペイン版画の史的展開」に、「ドラクロワ」「マネ」ら19世紀イギリスやフランス画家による「スペイン趣味の版画作品」が主である。

ラモン・カザス 《「アニス・デル・モノ」》のポスター 1898年 リトグラフ



パブロ・ピカソ 《泣く女》 1937年 エッチング・アクアテイント

愛人「ドラ・マール」を描いた表現は、押さえきれない絶望感を端的に表して、像の耳は結び目のようであり、目は皿状、歯は歪んでギザギザしており、鼻は突き出し、髪はマンティーリヤで覆われて、悲痛な表情でハンカチを噛み、手に固く握りしめられている。その手は、あまりにも強烈に見えるため、まるで彼女の緊張と苦痛の全てを集約しているような嘆きを表現した作品。

ホアキン・ソローリャ 《水飲み壺》1904年 油彩/カンヴァス 初公開

バレンシアの海岸を舞台に、少女が小さな子供に水を飲ませる場面を描いた作品で、画伯生誕100年を記念しスペインの記念切手の図柄に選ばれている。